

ワークショップⅠ：知識と実践をつなぐ教育：臨床における学びと育ちへの支援へ

【コーディネーター】

高知学園短期大学 三 浦 かず子（修士7期生）

高知県立大学 大 川 宣 容（35期生）

【企画の意図】

新人看護師の教育上の問題や課題を共有し、看護基礎教育と現任教育の役割の違いや共通点について理解を深め、一人ひとりの新人看護師のキャリア形成を目指し、知識と実践をつなげる教育として協働してできることを考える機会としたい。

【話題提供者の紹介及び話題提供者の概要】

看護基礎教育に携わる教員の立場として升田茂章さん（高知県立大学看護学部）から、看護基礎教育の現状の中で、講義－演習－実習のつながりを意識しながら学生とかかわっている。既習の知識を活用したり、関連づけて考えることが難しい、イメージができないといった学生の特徴を踏まえて、学生自身が考える力をいかに引き出すか、思考力をどう育むかを大事にしたかかわり方を模索していることについて話題提出していただいた。

実地指導者として新人看護師教育にかかわった経験を通し宮崎里沙さん（高知医療センター）から、病棟のルチーンワークは問題なくできて、患者に必要な看護が実践できないのはなぜかという問題提起がされた。知識はあるのに、患者に必要な看護と認識できず実践できていないことがあり、新人看護師の考えを引き出し指導することの重要性を感じていることを話していただいた。

【交流会でのディスカッション内容】

私たちは自分で考え行動できる看護師を育てたいと思っている。新人看護師の立場からは、疑問を持ってでも言語化してもいいのだろうか戸惑っている場合もあり、考えるための時間と場を持ったり、先輩看護師から伝える機会を作ったりすることも重要となる。「看護は患者の生活を支える」という核となるものを基礎教育でちゃんと学んでいる看護師は、思考力を鍛えていくことでどんな状況でも患者のためにどう行動すればよいかを判断できるようになる。「何故そうするのか」「何故そう思うのか」という発問をうまく使いながら、経験を振り返ってもらうことで、問題意識を持ち自分で考えられる看護師を育てていきたい。



ワークショップⅡ：基本から応用へつなぐ教育：実践力を育てる教育の工夫

【コーディネーター】

高知医療センター 寺 岡 美千代（修士11期生）

高知県立大学 瓜 生 浩 子（修士4期生）

【企画の意図】

シミュレーション教育の特徴やその効果、目的や対象者の基礎力に合わせた効果的なシミュレーション教育のあり方等について、教育事例の紹介やプログラムの模擬体験を通して検討することを目的とした。

【話題提供者の紹介及び話題提供の内容の概要】

話題提供者は、高知県立大学看護学部助教の井上正隆氏（修士6期生）であった。

前半は、シミュレーションの概略、種類、潮流等についての説明が行われ、井上氏が行っているシミュレーション演習の実際として、モデル人形や模擬患者を使用し場面を設定した演習が映像で紹介された。また、シミュレーションを用いた看護技術の教育方法が実演を交えて説明され、これらを踏まえて意見交換を行った。

後半は、参加者の協力を得て、高機能シミュレーターを用いた手術後患者の状態観察の演習を実際に行い、全員でディブリーフィングを体験した。

【交流会でのディスカッション内容】

前半は、シミュレーション教育の可能性と限界について意見交換を行った。看護教員としてシミュレーション教育を取り入れている参加者もあり、どのような方法で行い、どのような効果が得られているか等をお互いに紹介し合った。その中で、臨地実習で経験できることの限界や、実践経験が困難な技術や看護の学習を、シミュレーション教育を活用して補っていくことの必要性や、シミュレーション教育の発展の可能性を確認することができた。

後半は、高機能シミュレーターを用いた演習とディブリーフィングを実際に体験しての感想を出し合い、効果的なシミュレーション教育の展開方法について検討した。ディスカッションを通して、方法としてのシミュレーション教育を考えるというだけでなく、看護技術教育のあり方についても再考する機会となった。



ワークショップⅢ：気づきから倫理的思考へつなぐ教育－事例を用いたふり返りをとおして－

【コーディネーター】

高知県立大学 竹 崎 久美子（29期生）

【企画の意図】

倫理に対する敷居の高さを払拭し、倫理的感受性を高めて他の人と価値の違いについて語り合える雰囲気作りをすることが、実はよりよいチーム作りをする上で近道になるということを、参加者と共に共有することをめざした。

【話題提供者と話題内容】

話題提供者：伊勢田純子さん（高知赤十字病院）

スタッフ教育の中に『倫理』を取り入れている所属病院の取り組みについて紹介戴いた。初任者研修では倫理的課題に気づきそれを言葉にすること、中堅研修ではそうした課題をチームで共有する力を育てることで、参加者の病棟に成果が上がっていた。

話題提供者：星川 理恵さん（高知大学医学部附属病院）

家族看護専門看護師として各病棟の困難ケースに対応している経験から、対応事例の紹介を通して、患者・家族の一番近くにいたが故の看護師のジレンマと、それを解きほぐすスペシャリストの役割について紹介戴いた。

【交流会でのディスカッション】

お二人の話題提供からは、継続教育として『倫理』をとりあげることで、オープンに意見交換できる組織作りができること、そして、実際の困難ケースの場合は、第三者（スペシャリスト、ファシリテーター等）にも関与してもらうことで、当事者の価値対立の解明や優先順位の判断が行える可能性について確認した。

また後半では「Jonsenの臨床倫理四分割法」を用いて、新人看護師の考えた優先順位と先輩看護師の行動（優先順位）が異なったという身近な事例を通して皆で意見交換を行った。四分割法で新人・先輩それぞれが何を優先すべきと考えたかを出し合う中で、互いの価値観を認め合う雰囲気と、その中で「何が患者にとって最善か」「そのために看護師が行うべきこと」などが明らかとなり、身近なことから意見交換できる雰囲気作りの一端を体験することができた。



ワークショップⅣ：看護職としての発達過程を支援する教育：専門看護師への道

【コーディネーター】

高知県立大学看護学部 藤 田 冬 子
医療法人精華園 海辺の杜ホスピタル 福 田 亜 紀

【企画の意図】

修士課程から認定後の活動を通して、専門看護師に求められる実践能力や役割開発への能力をどのように育成してきたのかについてディスカッションし、スペシャリストとしての成長を支える教育について探る。

【話題提供者の紹介及び話題提供の内容の概要】

話題提供者は、認定後2年目の専門看護師（以下、CNS）で、小児専門看護師の三浦由紀子氏（高知県・高知市病院企業団立高知医療センター）、がん看護専門看護師の平田佳子氏（財団法人倉敷中央病院）である。それぞれの方から、CNSを目指したきっかけや大学院での学び、職場組織におけるCNSとしての活動紹介を通して、それぞれの時期での学びやCNSとしての能力を高めるために取り組んできたことについての話題提供をいただいた。

【交流会でのディスカッション内容】

ディスカッションでは活発な意見交換がなされ、大学院での学びが実際のCNSの活動にどのように活かされているのか、専門分野におけるCNSとしての実践能力向上に役立つ機会について、参加者間での理解を共有することができた。

同時に、CNSとして組織の中で役割開発をしながら、変革者としても活動を広げて成果を示していくためには、大学院課程での学びや専門分野における実践能力の向上だけでは十分でないことも議論された。また、日本専門看護師協議会臨床能力向上委員会によるCNSのコンピテンシーも参照し、より多角的に組織を分析する能力やコンフリクトを解決に導くための能力、プレゼンテーション能力、そして、自分自身を育てるための資源を獲得し活用する能力等の必要性と、そのための自己教育力について議論された。



ワークショップⅤ：保健師としての発達過程を支援する教育

【コーディネーター】

高知市保健所 北 村 真由美（34期生）

高知県立大学 石 川 麻 衣

【企画の意図】

参加者それぞれの状況や保健師現任教育の課題についての意見交換を通じて、互いの成長を支え保健師として育ち合うために教育として今後どのようなことが必要であるかについて、参加者と一緒に考える。

【話題提供者の紹介及び話題提供の内容の概要】

話題提供者の野口裕子さん（高知県障害保健福祉課）、島崎真由美さん（大川村役場総務課）からは、新任保健師として採用されてからの数年間の活動と新任保健師支援プログラムで支援を受けた内容について、自分自身の保健師としての成長を振り返りながら語っていただきました。

山本雅子さん（高知県中央東福祉保健所）からは、後輩や部下の育成経験豊富な立場から、その経験の中で感じていることや、高知県保健師人材育成ガイドラインの策定に関して、お話しいただきました。

【交流会のディスカッション内容】

3人の話題提供者からの発表を受け、自己紹介と話し合いを行いました。退職した保健師・大学教員・管理者・中堅保健師・新人保健師・学部学生と様々な参加者が、それぞれの立場から、保健師活動や教育に関しての意見を述べ合いました。

駐在制の時代を懐かしむ声や、住民に育ててもらった経験など、様々な意見が出る中で、現在管理者の立場にある参加者からは、新任保健師のおかれている状況の大変さに理解を示しつつ、今の自分の立場でできるOJT（On-the-Job Training）について思案している様子が語られました。中堅保健師からは、プリセプターの役割や、若手と中堅の間の立場での仕事のむずかしさ等が課題として挙げられました。

新人保健師からは、新任保健師支援プログラムの参加が「負担に感じることもある」と率直な意見が出た一方で、別の新人保健師から「支援体制ができていてうらやましい」という意見も述べられました。



ワークショップⅥ：養護教諭としての発達過程を支援する教育

【コーディネーター】

高知県立大学看護学部 池 添 志 乃（34期生）
高知大学教育学部附属小学校 中 尾 瑞 香

【企画の意図】

子どもの心身の健康課題が多様化・深刻化する中、学校保健活動の中核的な役割を果たす養護教諭は、健康課題の解決に向けて重要な責務を担っている。新規採用時から養護教諭は教育の専門家として、職務に関わる専門的知識や技術、実践的指導力を養い、その職責を果たすことが期待されている。新人の養護教諭は、これまで獲得してきた理論知を日々の実践経験を重ねる中で培った経験知と統合させ、試行錯誤しながら自らの専門性を発展させ、資質能力の向上に努めています。

そうした状況の中、養護教諭としての成長を支えるために経験豊かな退職養護教諭から学ぶサポーター制度が導入されるなど、資質能力の向上を図る様々な施策が行われている。本ワークショップでは、サポート活動の実際や新人の養護教諭の実践での専門性を高めるための取り組みについて紹介していただき、それらを共有しながら現代の養護教諭に求められている力を育む教育の在り方について考えていく。

【話題提供者の紹介及び話題提供の内容の概要】

話題提供者として、桑原瞳さん（高知市行川中学校養護教諭）と岡田久子さん（高知大学医学部看護学科）にお話をいただいた。2年目の養護教諭である桑原さんからは、「1年間を通しての困難感と克服方法」として保健室のあり方や教職員との連携、保健室登校の子どもへの対応、保健指導の不安などの視点から組織の一員としての養護教諭の取組の様子が語られた。また現在スクールヘルスリーダーとして現場の養護教諭の発展を支える岡田先生からは、保健室経営や保健教育、チーム援助など具体的な養護教諭の専門性向上への支援についてお話をいただいた。

【交流会でのディスカッション内容】

本交流会には一期生で養護教諭をされていた野島幸代先生や本学で養護教諭養成教育を支えてくださっていた松本女里先生、そして今春卒業し養護教諭として働く卒業生の参加があった。2年目として働く養護教諭からは試行錯誤しながらも自らの養護教諭観を形成し、他の教職員等と協働しながら主体的に養護実践を行っている様子が語られ、諸先生方から温かな実践への助言やエールがあった。参加した新人の養護教諭は豊かな技を学ぶとともに専門職として発達していく力につながっていた。本交流会をとおして、専門職としてのつながりは机上では得ることのできない知に触れる機会となり、そうした知が新人養護教諭の今後の実践の中で培われる知として統合され、専門職としての発展を支える糧になったのではないかと考える。



ワークショップⅦ：大学教育をふり返る－私たちが4年間で獲得したものを確かめよう！－

【コーディネーター】

高知県立大学看護学部 山 中 福 子
高知県立大学看護学部 松 本 鈴 子

【企画の意図】

このワークショップは、先輩看護師の体験から新卒の時期をどのように乗り越えてきたかを聴き、さらに今、奮闘中の体験を参加者とともに共有しながら、あらためて学生時代の学びを確認し、これからの活動に活かすことをねらいとしました。

【話題提供者の紹介及び話題提供の内容の概要】

大学を卒業して2年になる看護師谷本和香菜さん（55期生：高知赤十字病院）と、大学を卒業後、助産課程に進学し、助産師資格を取得され2年になる西浦渚さん（54期生：高知医療センター）をお迎えし、新卒時代の1年間に感じた課題とそれをどのように乗り越えたかを紹介いただきました。

谷本さんは、入職当初、看護技術が課題でしたが、周囲に自ら状況を説明し、力を借りて乗り越えられていました。そして、勤務に慣れてからの課題は、重症・緊急患者さんのケアと他の業務を同時に行うという多重課題への対応でした。多重課題に対しては、優先順位を考えるとといった「考える力」で乗り越えられていました。4年間の授業・実習で問われ続けたことが考える習慣の基盤となり、さらに看護師としての責任を自覚したことが考える力になったと紹介されました。西浦さんは、大変だった助産実習を乗り越えられたことが大きな自信となっていること、就職してからも、患者さんや家族、先輩に助けていただきながらも、経験の1つ1つを常に振り返り、課題を持つという取り組みを紹介されました。大学、助産課程をとおして、「考える姿勢」が身につく、壁と感じる前に出来事を振り返り、その時の自分を知る。このことが業務の段どりや、時間をやりくりするなどに繋がっているということでした。

【交流会でのディスカッション内容】

ワークショップには、昨年高知女子大学を卒業し、病院で新卒看護師として、今まさに奮闘中の方々15名が参加され、看護師となり4か月経過した現在の状況や進学の状況を紹介されました。

多くの参加者からは、今1つ1つの仕事を覚えることに精いっぱいであり、さらに失敗していないかという緊張と不安であることが話されました。また、未経験な出来事・技術に遭遇することに加えて複数の患者さんを担当し、優先順位をつけながらかわるこの課題があげられました。また、患者さん一人ひとりにじっくりと関わりたいという思いの中、限られた時間の中でその他の実施すべき業務をしなければならぬこと、また、様々な個性や考えをもつ医師や看護師とのかかわりなかで混乱しながらも何がよいのかと考えながら取り組んでいるようでした。

一人ひとりがさまざまな壁に立ち向かっており、まだまだ振り返る余裕がない参加者もいましたが、仕事を覚えることに翻弄されすぎ、患者さんを中心とした看護が考えられているのか？と自分に問いかけているということでした。看護師として成長するうえで重要である「看護を考える」という基盤がしっかりと卒業生の中に育っているのを確認できたワークショップとなりました。

